

1, はじめに

昨年度の岩手国体出場を受けて、今年度は国体初のベスト8を目指してチームを立ち上げた。ともあれ、私自身女子のチームの監督は初体験のことであり、多くの方々のサポートを受けてのスタートだった。

女子国体U16化が噂される中、U14も含めたラージグループでトレーニングを開始した。現時点で感じた課題を克服するようにトレーニングメニューを考え、1人1人の技術的な底上げもできればと思い取り組んできた。

システムは、当初1-4-3-3を念頭に置いていたが、選手の特徴もあって、1-3-1-2-2-2にも対応できるように準備してきた。結局8/5, 6の直前合宿の際に、男子のジュニアユースの協力も得て行ったTMにおいて、後者の方が選手たちの成功感もあり、ブロックで採用することにした。

初戦となった宮崎戦では、前半から支配するような局面が多かった。しかしながら、ペナルティエリア付近の攻撃が単発になってしまい、相手ゴールネットを揺らすところまでは行かなかった。後半、カウンターから得点を許したあとは、1-4-3-3に切り替えサイドを生かした戦術に切り替え、得点を狙った。PKで追いついたあとも、何度か相手ゴールに迫るシーンがあったが、なかなか得点を奪うには至らず、延長戦にコーナーキックから失点し、敗戦した。

大会を通じて各県のチームの試合を全部観戦することができた。大会前は福岡・鹿児島が頭1つ抜けていると聞いていた。しかし、九州各県のレベルも拮抗してきて、2県との差は縮まってきているように感じた。それ故に酷暑の中、15名で闘うというレギュレーションでは、選手層の厚さやフィジカル面での強さが要求されてくる。来年度に向けて、より一層の大分県のレベルアップを図っていく必要がある。

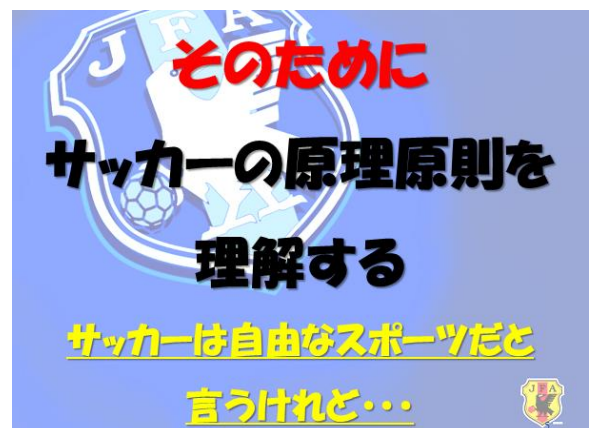
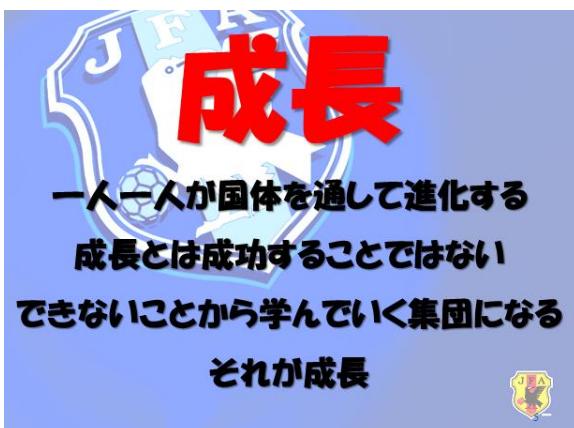
2, 大会結果

$$\text{大分} \quad 1 \quad \begin{pmatrix} 0-0 \\ 1-1 \end{pmatrix} \quad \begin{matrix} \text{延長} \\ \begin{pmatrix} 0-1 \\ 0-0 \end{pmatrix} \end{matrix} \quad 2 \quad \text{宮崎}$$

※代表県→福岡県、鹿児島県



3, チームコンセプト



4, 成果と課題

(1) 攻撃

① 動きながらのコントロール～ハイプレッシャー・ハイテンションの中での精度～

暑熱下での試合では、1人1人が長い距離を走り、体力を消耗してしまうことはできるだけ避けたい。当然のことながら、短いパスをつなぎながらゲームを支配し、数的有利な状況の中でタイミング良くアクションを起こし、意図的に得点に結びつけるようなサッカーができなければならない。チーム立ち上げ当初から、そのような場面を想定し、横・後ろ・前からのボールをコントロールしたり、守備を観ながらプレッシャーを受けないポジショニングをとったりするトレーニングを重ねてきた。ブロックでは、中盤や前線の選手に対するプレッシャーが激しかった。そんな中で、相手が来ている方向にコントロールしたり、背後の相手が見えずにインターセプトされたりして、ボールを奪われる局面が多く観られた。ハイプレッシャーの中でも、相手とかけひきしながら、コントロールすることにストレスを感じないような技術に高めていく必要がある。

② 観る・観ておく

今回、特にトレーニングの時に言い続けてきたことである。自分がプレーする前には、必ずピッチ全体の状況を把握し、相手の状況から自分が何をすべきかを決めておくこと。その中で、チーム全体として、相手のどこを攻撃していくのかを決めることを要求してきた。しかし、攻撃が右サイドだけに終始して、結局体力を消耗し、選手交代を余儀なくされてしまった。中央の選手

自立した選手を育成するために・・・

思考を停止させない

例: ゴールを目指す
前に進むことが重要なのではなく

- ・いつ進むか(WHEN)
- ・どうやって進むか(HOW)
- ・どこから進むか(WHERE)
- ・誰が走るべきか(WHO)

を考えさせ、理解させる

(CB,AV,FM) がもっと意識して、バランスよく意図的に攻撃を組み立てていくことができなければならない。観る・観ておくというと、瞬間的なイメージがあるが、それを継続し観続けていくことが大切だと感じた。

③ 3つのスピード～判断・パス・フィジカル～

パス・(正確性)

- 意図のあるパス

特に**強く蹴る**ことが選択肢を増やす

蹴った足が一步で動く・・・強く蹴ることにつながる

- パスはタイミング良く人に出す
- 動いている人の足元へ強くパス

From one's Feet to one's Feet!

サポート(関わり)

- 状況判断
- いつ、どこに、どのように関わるか

- ・ゴールへ向かうサポート
- ・ボール失わないサポート
- ・距離(相手のプレスの強弱によって変化)

判断

- 観る。常に観ておく
- 状況把握(判断を変える柔軟性)
- 予測
- 決断(躊躇しない)

各県の実力が拮抗してくればくるほど、よりハイプレッシャーな状況のゲームになる。その中で、要求されてくるのがプレーのスピードである。観る・観ておくことから予測し、いち早く自分のプレーを決定し実行する。このプライオリティを選手たち自身がスピーディーに自動的にできるようにトレーニングでも強調してきた。コントロールしてからタッチ数が多かったり、ファーストタッチが体から離れてしまったりすることで、くさびのボールが入らなくなる。普段何気なくやっているプレーをゲーム状況と結びつけ、スピードや精度を要求した。しかし、まだまだそのスピードが遅く、右サイドから左サイドにボールを動かさそうとしても、相手のスライドが追いついてしまうという局面があった。

これらのスピードで数的優位を作り出した状況で、個で突破できる選手も必要である。特に、サイドでの1対1からシュートやクロスに結びつけることができる選手は、ブロック大会突破には欠かせない。対戦相手の宮崎には、ワンタッチでスピードに乗って、DFをかわしてゴールに迫る強い個がいた。

④ ペナルティ付近の攻撃～基本から創造～

「サッカーは自由なスポーツ」というイメージを持ちがちである。だからといって、1人1人が自分勝手なプレーを続けていては、攻撃は完結しない。結局、個に頼るしかなくなる。なでしこの強さは、それぞれのポジションが原理原則を守ってこそ、あの栄光にたどり着いたのだと思う。そういう意味で、今回ゴール前の崩しでは、中盤の選手にボールが入ったとき、どのようなアクションでゴールに迫るかを3つ提示した。サイドの選手のカットイン、いったん中央の選手を經由してサイドの選手を使う、サイドの選手から逆のサイドの選手へのアーリークロス。自由なのは、この原理原則を守ってボール保持者がどれを選ぶか、である。また、守備の状況を観て、この3つをどう組み合わせるかである。しかし、このような状況ができる前に、DFの背後にボールを蹴って相手GKのボールになったり、隊形が整っているのにも関わらず、アクションのタイミングがわからずに横パスをカットされ、カウンターにつながられてしまったりする局面が多かった。難しい場面ではあるが、もっとトレーニングで積み上げていく必要があった。

⑤ フィニッシュの精度

今回幾度か相手GKと1対1になることがあった。トレーニングでは、①四隅を狙う②強いシュート③タイミングを外す④GKを抜く、の4つを徹底してきた。しかし、思ったところに蹴れなかったり、GKポジションを確認していなかったり、その選択肢が身につくまでにはいかなかった。本番でも、シュートチャンスを決めることができず、優位にゲームを進めることができなかった。キックの基本も含めて、その重要性を痛感させられた。

(2) 守備

① 玉際の強さ

昨年度から1対1での守備の強化については、理解していた。体を寄せてボールを奪う技術については、よくトレーニングできていた。今年度は、速くアプローチしながらも奪われない強さを要求した。宮崎戦では、アプローチには行くものの奪いきれず、こぼれたボールを相手につながれピンチを招くシーンが多かった。アプローチの角度や相手の出方でどこにボールがこぼれるのか予測することも大切である。

② 観る・観ておく

宮崎戦では、3バックを採用した。直前合宿やミーティングでサイドにできるスペースを、誰が、いつ、どのようにカバーするかについては十分確認していた。選手たちはよく理解し、CB逆サイドを観ながらコミュニケーションをとりしていた。しかし、中盤から前線の選手のくさびのパスへのケアが不十分で、相手のCFに簡単にボールが入ってしまうことが多かった。自分の背後の状況を確認して、横パスをさせることはミーティングで押さえていたが、攻撃のスピードについて行けず、中盤と最終ラインが間延びし、アプローチが遅れたことも原因としてあげられる。その結果、最終ラインがボールウォッチャーになり、マークを同一視できず、GKと1対1を作られる場面が多かった。しかし、GKの良いポジションからのシュートブロックや粘り強い対応で得点を許さなかったことは特筆すべき成果だと思う。

③ 前線からの守備

守備の改善で最も重要視したことである。世界のトップ選手の前線での守備の映像を見せ、TMでも要

求してきた。宮崎戦でも相手のビルドアップに対して、長い距離でもよく走ってコースを限定し、高い位置でボールを奪うことができていた。しかし、ボールを失ったときの対応が遅く、相手にカウンターを許してしまうことが多かった。さらに、「横パス三本で奪う」を合い言葉に、ボールの前に立つことを意識させてきたが、スプリントが足りなかったり、後ろとの連携がとれなかったりして、くさびのパスから反撃を許す場面も多かった。ボールを奪うために前線の守備の原理原則を理解し、コンパクトな状況からボールを意図的に奪えるようにする必要がある。

④ 攻撃と守備の一体化

「切り替え！切り替え！」という言葉がゲーム中よく聞く。TMではサイドが高い位置をとって攻撃に参加したり、CBがセンターラインを越えてサイドチェンジに加わったりすることを要求してきた。もし、途中でボールを奪われたとしても、素早くボールを奪い、攻撃につなげていく。すなわち、攻撃のあとに守備があるのではなく、攻撃に参加していることがすでに守備をしていることになる。逆も同じようなことが言える。ところが、宮崎戦では、相手の出方を見るために、サイドの選手を守備的に配置してしまった。それが原因で、前線へのサポートが遅れて攻撃に人数がかけられなかった場面があった。選手もおそらく戸惑いを感じたことだろう。これは、これまでやってきたことをぶれずにやりきることができなかった私のミスである。

(3) チームとして～チーム戦術の徹底～



3月に立ち上げて以来、最終メンバー決定が遅れ、チームとして20人がどうチームとして機能していくかが大きな課題となった。そこで、直前合宿では、ポジションごとに部屋割りをし、自分たちがやるべきことを話し合わせ、ボードにまとめさせ、全体で確認した。今まで、トレーニングで言い続けてきたことを選手たちはよく覚えてくれていた。バックアップの選手たちも、自分たちの役割を理解し、ブロック大会でも、精一杯チームを支え続けてくれた。そんな選手たちを勝利に導けなかったことが悔やまれてならない。

5. 今後に向けて

今回チーム立ち上げ時から、協会関係者をはじめ、県リーグ、九州リーグ、インターハイの最中、自チームの強化も犠牲にして選手の派遣、さらにチームでの選手のレベルアップにご協力いただいた指導者の方々には衷心より感謝申し上げます。また、県体育保健課、体育協会の諸先生方には、お忙しい中、練習・合宿での激励、そして何よりも当日の応援、本当にありがとうございました。

ミーティングでの映像で使った「HISTORY MAKER」の曲のもと、本国体でベスト8以上を獲得し、歴史を作ろう、を合い言葉に活動してきた。監督として代表権をとれなかったことに対する力不足を痛感している。しかしながら、今回、国体女子チームを任せていただいたことで、県の女子のレベルアップに向けて技術委員長としてやるべきことが見えてきたような気がする。女子委員会の協力も得ながら、県の体制を考えていければと思っている。

最後に、半年間、わがままばかりの監督を陰で支えてくれたスタッフ、お世話になりました。文句を言わずひたすらついてきてくれた選手たち、本当にありがとうございました。1人1人が本当に良いスタッフ・良い選手でした。

「大分は一つ」を合い言葉に、いつの日か歴史が作られることを祈りながらレポートを閉じたい。

